| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | 織・編 | | |
| 授業担当者名 | 杉浦　晶子、鈴木　成子、ファッション造形学科 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 2年次前・後期 |
| 教員担当形態 | オムニバス | ナンバリングコード | 223-1FCT2-05 |
| 備考 | 実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)織機・編機の構造を理解し、使い方を習得する<br>(2)基本的な織り方・編み方の技法を身につける<br>(3)素材にあった織り方・編み方と仕上げの方法を習得する<br>(4)織と編の基本構造を理解する<br>以上を到達目標として、課題を完成させる。 | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「知識・技能」◎、「思考・判断・創造力」○ | | |
| 授業の概要 | 【織】<br>本格的な足踏み式手織機を用い、純毛マフラーを制作する。平織、綾織、ななこ織を練習し、好みの配色でマフラーを織上げ、縮絨（毛織物の仕上げ）をする。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>染織作家としての実務経験を活かした作品制作の指導やアドバイスを基に、「織物」に対しての知識を深め、技術を習得する。<br><br>【編】<br>編機を使用して、基本的な操作方法を学びながらモヘアのスヌード、ネックウォーマーを製作し、編地の基本構造と特徴を実習を行いながら学ぶ。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>編物講師としての実務経験を活かした作品制作の指導やアドバイスを基に、「編物」に対しての知識を深め、技術を習得する。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | 【織】<br>マフラーの完成度と創意工夫（80%）、仕上げとレポート（20%）<br>【編】<br>作品の提出（90%）　受講態度（10%）以上2点から総合的に評価する。<br>※作品提出日は厳守。<br>【織】【編】の成績を総合的に評価する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 【織】〈杉浦 晶子〉<br>第01回　手織の行程、糸量の計算<br>経糸の整経<br>第02回　経糸を織機にセット<br>第03回　経糸を織機にセット<br>試織（平織、綾織、ななこ織）<br>第04回　マフラーの制作<br>第05回　マフラーの制作<br>第06回　マフラーの制作<br>第07回　かけつぎ　房の始末<br>第08回　マフラーの縮絨<br>組織図作成<br>＜授業全体の振り返り＞と講評会<br><br>【編】〈鈴木 成子〉<br>第01回　編機の説明と編目が出来る原理を学習する。<br>編み物の基礎と編機の使い方を学ぶ。編み方の練習<br>第02回　引き上げ模様のスヌードの制作<br>第03回　ネックウォーマーを編むための編み方の練習<br>引き上げ模様のスヌードのアイロン、仕上げ<br>第04回　ネックウォーマーの縄編み模様の制作<br>第05回　ネックウォーマーの縄編み模様の制作<br>第06回　ネックウォーマーのメリヤス編みの制作<br>ネックウォーマーを製図にピン打ち、アイロン<br>第07回　ネックウォーマーを編機を使い、はぎ<br>ネックウォーマーの、とじ<br>第08回　実習　ネックウォーマーの仕上げ、<br>＜授業全体の振り返り＞、作品提出日<br><br>※1回は90分授業を2コマ分とする<br>ただし、8回目は1コマ（90分）とする。 | | |
| 使用教科書 | 【織】<br>プリント配布<br>【編】<br>提出作品のオリジナルテキスト、編み機に関する資料<br>編み機に付属のテクニックブック、トラブルブック | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 【織】<br>手織りに関する資料を読み、制作の行程、平織・綾織の仕組みを確認しておく。（週90分）<br>配色によっては時間がかかるため、授業前後の時間を利用して課題を進める。（週90分）<br>【編】<br>編み機に関する資料を読み部品用語と操作用語を事前に学んでおく。（週90分）<br>制作に時間がかかるため授業前後の時間も利用して編むようにする。<br>また、教室に置いてある棒針、かぎ針、ポンポンメーカー、教則本を利用する。（週90分） | | |

授業概要（シラバス）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | 染色デザインⅠ | | |
| 授業担当者名 | 白柳　まどか | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 2年次前期 |
| 教員担当形態 | 単独 | ナンバリングコード | 223-2FCT2-06 |
| 備考 | 実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | 一人の手で始めから、最後まで行う手染の技法を習得する。手仕事の個性と、技術から生まれる独特の美の世界を知る。各々の感性や自由な発想力を養う。<br>(1)色、形、空間などの模様を構成する要素について理解する<br>(2)型紙を用いる型染の特徴を知り、技法を体験する<br>(3)個性的なオリジナルの図案を考える<br>(4)技法による制約を理解し、限界に挑戦する思考を培う | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「思考・判断・創造力」◎、「知識・技能」○ | | |
| 授業の概要 | 防染法（型染）と直接法（ステンシル）を用いて、実際に作品制作をする。技法による制約や限界に挑戦しながら、作業を進める中で、技法による何らかの発見があることを期待する。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>染色作家としての実務経験を活かした作品制作の指導やアドバイスを基に、「染色（型染め）」に対しての知識を深め、技術を習得する。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | 作品にレポートをつけて提出（課題2点とレポート2点）。作業内容が多いため、欠席を避けること。授業内容の理解度と作品の完成度（作品の評価50%、レポート20%）、授業への取り組み（30%）として、評価する。さらに、作品の評価については、授業内容の理解度に加え、各々の創意工夫を評価する。準備したものを持参しないと、作業に支障をきし、評価に影響するため、忘れないようにすること。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　染色技法とデザインの必要性について学ぶ。<br>「型染」技法説明、参考作品を見る。デザインを決め、下絵を描く。<br>第02回　デザインチェック、型紙を彫る、紗張りをする。<br>第03回　型染実習（1）　糊をつくる、型付。<br>第04回　型染実習（2）　色差し。<br>「ステンシル（摺り込み）」技法説明、参考作品を見る。<br>第05回　型染実習（3）　色止め、水元。<br>「ステンシル」デザインチェック、型紙を彫る。<br>第06回　ステンシル実習（1）　1色目の摺り込み、「型染」講評と振り返り。<br>第07回　ステンシル実習（2）　2色目、3色目の摺り込み、講評とフィードバック。<br>＜授業全体の振り返り＞ | | |
| 使用教科書 | 資料プリント配布 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 日頃から、美しいと感じる物の写真や、絵などを集めておくと、デザインを決める際に、スムーズに作業に取りかかることができる。自己学習（予習）として模様やデザインの構成を考えてくる。（週90分）<br>また、作業のつづきやレポートを作成する。（週90分） | | |

授業概要(シラバス)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | 舞台芸術・衣裳 | | |
| 授業担当者名 | 岡田　直子、前田　純代、ファッション造形学科 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 2年次前期 |
| 教員担当形態 | オムニバス | ナンバリングコード | 223-1FC01-01 |
| 備考 | 実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)オペラの内容、時代背景、作曲家、ドラマの特徴を理解する<br>(2)演出家によって描かれる表現や個性の違いを理解する<br>(3)作品選びから舞台上演まで創造過程と実際に行われる作業について理解する<br>(4)作品における人間像と表現について自主的な視点と感性を磨く。<br>以上を到達目標として、オペラを主に舞台芸術とその衣裳についての基本的な知識を修得する。 | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「知識・技能」◎、「思考・判断・創造力」○ | | |
| 授業の概要 | この授業では、舞台衣裳の創作に直接結びつくオペラを映像で鑑賞し、歌・管弦楽・演奏・オペラハウス・台詞・演技・演出・演劇・文学・美術・建築・歴史・哲学・社会史・宗教・心理学・自然科学にいたるまで、オペラに関するありとあらゆる人文諸科学を詳細に考察しながら、「舞台芸術の魅力」に迫る。<br>また、実際に4演目のオペラの内容に基づいて、各々のキャスト・合唱・その他の出演者の衣裳をデザインして衣裳香盤を作成する。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>舞台演出家としての実務経験に基づき、舞台の現場について具体的な事例を交えながら1つの舞台が完成するまでを総合的に解説する。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | 劇場内での作業を中心としたプロフェッショナル育成を目的とした科目である。時間厳守・受講態度・礼儀などの評価を重視する。<br>受講態度（20%）、授業課題（80%）で舞台芸術と舞台衣裳を合わせて総合的に評価する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 【舞台衣裳】　＜前田＞<br>第01回　舞台衣裳について<br>・舞台衣裳の持つ役割、意味、効果、その他<br>第02回　衣裳香盤と衣裳デザインについて①<br>・ソリストと合唱の関係。<br>・オペラ「アイーダ」「コウモリ」について<br>第03回　衣裳香盤と衣裳デザインについて②<br>・オペラ「椿姫」「カルメン」について<br>第04回　劇場のあり方について〈外部講師〉<br>・バックステージでの作業・専門用語など<br>・実践で必要なマナー、常識などを学習する。<br><br>【舞台芸術】　＜岡田＞<br>第01回　オペラ「アイーダ」から<br>音楽とヴィジュアルの魅力：グランドオペラ形式<br>第02回　オペレッタ「こうもり」から<br>セリフと芝居と人間の描き方：演出によって異なる個性<br>第03回　オペラ「椿姫」から<br>作曲家とオペラのドラマトゥルギー：オペラは人生の写し絵<br>第04回　オペラ「カルメン」から<br>登場人物の性格付けと表現：変化するから面白い<br><br>※1回は90分授業を2コマ分とする<br>ただし、「舞台衣裳」の第4回の授業については1コマ（90分）とする。<br>※最終授業にて、＜授業全体の振り返り＞を実施。 | | |
| 使用教科書 | 担当者作成の資料。 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 授業時に示される次回授業の作品について予習する。（週90分）<br>授業時に示された作品についてさらに造詣を深め、その原作を読む。<br>また、自主的に課題の作品はもとより、同じ作曲家の他の作品など関連作品を鑑賞する。（週90分） | | |

（ファッション造形学科・実務経験のある教員担当科目）

授業概要(シラバス)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | グッズ･クリエイトⅠ | | |
| 授業担当者名 | 小川　明伸 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 2年次後期 |
| 教員担当形態 | 単独 | ナンバリングコード | 223-2FSC2-03 |
| 備考 | クリエイティブコースのみ<br>実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)物作り（バッグ）の製作工程を理解する<br>(2)革用ミシンの使用方法を習得する<br>(3)革の基本的裁断技術を習得する<br>(4)限られた環境（時間・道具）の中で段取りを組む力を身に付ける<br>以上を到達目標とする。 | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「思考・判断・創造力」◎、「知識・技能」〇 | | |
| 授業の概要 | 与えられた3個の課題を、材料の選択、確保から始まり、裁断　手作業　縫製と手順を踏み完成させる事を、目的とする。特にレザーを使用する事により必要となる皮漉き機や総合送りミシン（平ミシン・腕ミシン）の基本的な使用方法を習得する。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>鞄デザイナーおよび作家としての実務経験を活かし課題の製作指導を行い、「鞄」製作に対しての知識を深め、技術を習得する。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | (1)授業への参画態度　（30%）<br>(2)作品を作る過程における段取りのよさ　（30%）<br>(3)前作で習得した事が、次回作にどれだけ生かせるか（応用力）　（30%）<br>(4)作品の完成度　（10%）<br>以上4点から総合的に判断する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　本授業を受けるにあたり、必要な道具及び材料の調達方法の説明<br>第02回　1作目　帆布製トート　裁断<br>第03回　1作目　帆布製トート　裁断　手作業<br>第04回　1作目　帆布製トート　手作業　縫製　　この回で完成予定<br>第05回　2作目　レザーA4 ショルダー　裁断<br>第06回　2作目　レザーA4 ショルダー　裁断　手作業<br>第07回　2作目　レザーA4 ショルダー　手作業　縫製<br>第08回　2作目　レザーA4 ショルダー　手作業　縫製<br>第09回　2作目　レザーA4 ショルダー　縫製　　この回で完成予定<br>第10回　3作目　リュック（生地or革）　裁断<br>第11回　3作目　リュック（生地or革）　裁断　手作業<br>第12回　3作目　リュック（生地or革）　手作業　縫製<br>第13回　3作目　リュック（生地or革）　手作業　縫製<br>第14回　3作目　リュック（生地or革）　手作業　縫製<br>第15回　3作目　リュック（生地or革）　縫製　　この回で完成、授業全体の振り返り | | |
| 使用教科書 | なし | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 授業準備として生地の裁断、次回授業に向けて復習と予習をしてくる。（週90～180 分） | | |

授業概要(シラバス)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | グッズ･クリエイトⅡ | | |
| 授業担当者名 | 鈴木　達也、内山　友晴 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 3年次前期 |
| 教員担当形態 | 複数 | ナンバリングコード | 223-2FSC2-04 |
| 備考 | クリエイティブコースのみ<br>実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)靴の基本的な構造を学ぶ<br>(2)採寸等を行い自分の足を分析する<br>(3)様々な革の特徴を分析する<br>(4)トータルのデザイン力やそのデザインを形にする技術を実習を通して取得する<br>以上の(1)～(4)を到達目標とする。 | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「思考・判断・創造力」◎、「知識・技能」○ | | |
| 授業の概要 | ファッションアイテムの一つでもある靴の製作技術や皮革の基本的な知識を学ぶことにより、トータルでファッションを生み出す力を身に付ける。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>靴職人としての実務経験を活かし課題の製作指導を行い、「靴」製作に対しての知識を深め、技術を習得する。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | 提出作品(40%)、授業への参画態度など(60%)を総合的に判断して評価する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　靴について(資材等の説明・革の特徴について等)<br>第02回　使用機器・道具の説明<br>第03回　靴の製作方法について<br>第04回　採寸等により足を知る<br>第05回　靴のデザインを知る<br>第06回　靴の製作（製甲作業）<br>第07回　〃<br>第08回　〃<br>第09回　〃<br>第10回　底付作業<br>第11回　〃<br>第12回　〃<br>第13回　〃<br>第14回　仕上げ作業<br>第15回　靴と永く付き合う為の手入れを知る・作品提出<br>＜授業全体の振り返り＞ | | |
| 使用教科書 | 担当者作成資料 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 専門の機器を用いた授業の為、授業の復習(ミシンの動かし方等)をすること(週90分)<br>靴についての知識を深めるため専門的な視点で靴や販売店(web等を含む)を観察すること。(週90分) | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | テキスタイル制作 | | |
| 授業担当者名 | 島上　祐樹 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 3年次前期 |
| 教員担当形態 | 単独 | ナンバリングコード | 223-4FSC3-05 |
| 備考 | クリエイティブコースのみ<br>実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)目的にあったテキスタイルを企画する能力を身につける<br>(2)企画したテキスタイルを設計する能力を身につける<br>(3)設計したテキスタイルを制作する能力を身につける | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「意欲・態度」◎、「思考・判断・創造力」〇 | | |
| 授業の概要 | 自らイメージしたテキスタイルを設計し、制作する。<br>扱うテキスタイルは織物を中心とする。<br>制作に必要なテキスタイルの設計（素材、糸種、織物規格、加工）を行う。<br>設計したテキスタイルを制作、完成させて、プレゼンする。<br>テキスタイルコンテストへも積極的に参加する。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>研究所研究員として培った織機の知識・技術に基づき、テキスタイル制作のあらゆる機器の紹介や制作課題を通して実践的な技術に対する理解を深める。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | ①授業への参画態度（20%）<br>②作品の完成度（50%）<br>③ポートフォリオ、およびプレゼン（30%）<br>以上3点から総合的に評価する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　授業全体の説明　染色の基本操作<br>第02回　織物の基本操作①　設計・準備<br>第03回　織物の基本操作②　製織・仕上げ<br>（第4回から第14回までは、各自の作品の企画と制作をおこないます。）<br>第04回　企画・計画<br>第05回　試作①<br>第06回　試作②<br>第07回　企画発表<br>第08回　制作①<br>第09回　制作②<br>第10回　制作③<br>第11回　制作④<br>第12回　制作⑤<br>第13回　制作⑥<br>第14回　制作⑦<br>第15回　完成作品の発表、および＜授業全体の振り返り＞ | | |
| 使用教科書 | 担当者作成資料 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | たて糸準備、製織は時間がかかるため、計画通りに進められるよう織物の基本知識を復習しておく。（週90分）<br>テキスタイル論で学習した織物の項目を特に見直しておくこと。<br>授業が開講される前までに作りたいテキスタイルのイメージを膨らませておく。（週90分）<br>必要があれば、事前に授業担当者と相談する。 | | |

授業概要(シラバス)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | 創作テキスタイル | | |
| 授業担当者名 | 杉浦　晶子 | | |
| 単位数 | 1単位 | 開講期（年次学期） | 3年次前・後期 |
| 教員担当形態 | 単独 | ナンバリングコード | 223-2FCT3-09 |
| 備考 | 実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | (1)ドビー式コンピューター織機と同じ構造であるレバー式卓上織機を使用し、思い通りの組織を織る技術を身につける。<br>(2)目的にあった素材や密度を選び、必要な糸量の計算方法を身につける。<br>(3)独創性のある素材や織り方を工夫する力を養う。<br>(4)思考・判断し適切な仕上げをする。 | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「思考・判断・創造力」◎、「意欲・態度」○ | | |
| 授業の概要 | 2年次の授業で織の全ての工程と平織、綾織、ななこ織を学習した学生を対象とし、柔軟な発想を持って素材や織組織を選択し、独創性かつ面白みのある織物を自由制作する。服地、バッグ地、ショールなど明確な使用目的をもったテキスタイル、またはテキスタイルコンテストに応募するための作品を製作する。<br>たて糸の動きがわかりやすいレバー式卓上織機を使用するので、平織、綾織の他にも二重織や昼夜織、ワッフル織など多綜絖組織に挑戦できる。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>染織作家としての実務経験を活かした作品制作の指導やアドバイスを基に、「織物」の知識と技術を通して実践的な創作に対する理解を深める。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | ①授業への参画態度（10%）<br>②作品の創意工夫と完成度（80%）<br>③織の基本の理解度……デザインや制作を進める過程とレポートで判断する。（10%）<br>以上の割合で評価する。 | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　様々な素材や組織の織物を吟味し、発想を具体化し草案を提出する。<br>第02回　草案から技法・素材・色などを決定する。<br>組織図の作成、糸量の計算<br>（次回までに材料を必要量準備する）<br>第03回　経糸の整経<br>第04回　経糸の整経・経糸の筬通し<br>第05回　経糸の綜絖通し<br>第06回　経糸の巻き取り<br>第07回　織り付け、 試織<br>第08回　織る<br>第09回　織る<br>第10回　織る<br>第11回　織る<br>第12回　織る<br>第13回　カード織（早く完成した学生のみ）<br>第14回　カード織（早く完成した学生のみ）<br>仕上げ（傷なおし、房つくり等）<br>第15回　縮絨・水通し・講評　＜授業全体の振り返り＞ | | |
| 使用教科書 | 必要なプリントを配布 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 日ごろからテキスタイル素材に興味を持ち、面白い布を見つけたらよく観察しておく。<br>2年次で履修した織の基本を復習しておく。（週45分）<br>授業において決定した作品の糸量を計算し、最適な材料を準備する。（3時間）<br>次回の作業工程を確認する。（週20分）<br>平織・綾織以外の組織図を本などで確認し、デザインを具体的に考える。（週45分）<br>織り上げた作品を仕上げする前に、織傷をなおしたり房を作る。（2時間） | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 授業科目名 | ＴＡケーススタディ（含インターンシップ） | | |
| 授業担当者名 | 竹内　徹、ファッション造形学科 | | |
| 単位数 | 2単位 | 開講期（年次学期） | 3年次後期（集中） |
| 教員担当形態 | 単独 | ナンバリングコード | 223-3FTA3-02 |
| 備考 | 衣料管理士1級選択科目<br>実務経験のある教員担当科目 | | |
| | | | |
| 授業のテーマ及び到達目標 | TAに求められる役割である企業と消費者間のパイプ役となり、両者の関係を円滑にするために必要な品質管理について、その基本的な考え方を習得し、不良品の発生を未然に防止する能力を養うとともに、近年、対応が求められている企業価値や持続可能な社会を目指す方策についても考える。<br>本講義は下記4項目を到達目標とする。<br>(1) 品質管理の基本的な考え方を理解する<br>(2) 繊維製品の生産における実際的品質管理を理解する<br>(3) 品質苦情事例の要因分析能力と再発防止能力を養う<br>(4) 製品の品質は企業の品格であり、消費者は製品を通して企業を見ていることを理解する | | |
| ディプロマポリシーとの関連 | 「協働力」◎、「思考・判断・創造力」○ | | |
| 授業の概要 | 始めに品質管理の基本を学ぶ。<br>次に、企業と消費者の関係は、消費者苦情から読み解くと分かりやすいので、実際の苦情事例を基に現象の確認、原因推察、推察した原因の確認方法、再発防止策等について考察する。<br>また、近年、業界の課題となっている企業の社会的責任問題、持続的社会を目指す方策等については、品質管理部門が兼務する企業も多いことから、これらの問題の基礎的な知識習得、対応力の向上を目指す。<br>講義は配布するプリント及び新刊「苦情品診断学実践講座」（日本繊維製品消費科学会）を中心に進め、具体的事例は苦情発生時の画像を利用する。<br>講義は、講師からの一方通行でなく、学生が考えること、意見を述べることを重視する。<br>具体的な苦情事例対応では、グループに分かれて学生同士で検討し、代表するグループが発表する、又は、各自がグループ検討内容をまとめたレポートを各時限終了時に提出する方式とする。<br><br>＜実務経験と本科目との関連＞<br>繊維商社の品質管理担当者として培った経験に基づき、現場での具体的な実例を交えながら総合的に解説することでテキスタイルアドバイザー（TA）としての知識を深める。 | | |
| 学生に対する評価の方法 | 平常の講義への参画態度（質問への回答、発言等）20%<br>第2回講義以降、各回実施する理解度確認および提出レポートの評価合計　80% | | |
| 授業計画（回数ごとの内容、授業技法 等） | 第01回　品質管理とは？　品質管理の歴史、品質管理の定義、品質管理の対象について学ぶ<br>顧客の品質に関する要求事項について理解する<br>第02回　品質管理の実施、管理のサイクル、管理と改善、品質保証、検査について学ぶ<br>繊維製品の品質管理、ISO9000ファミリー関連規格、繊維製品に関連する法律について学ぶ<br>第03回　品質苦情を解決するための基本を学ぶ<br>具体的な苦情事例を見ながら、対応の手順を学ぶ<br>第04回　色に関する苦情（1）　＊第4回から第7回はグループ検討・発表・レポート提出を基本とする<br>第05回　色に関する苦情（2）<br>第06回　損傷・形態変化に関する苦情<br>第07回　縫製と副資材に関する苦情<br>第08回　CSRと各種監査、SDGｓ、LCA等について学ぶ、授業全体の振り返り<br>第09回　インターンシップ<br>第10回　インターンシップ<br>第11回　インターンシップ<br>第12回　インターンシップ<br>第13回　インターンシップ<br>第14回　インターンシップ<br>第15回　インターンシップ | | |
| 使用教科書 | 1. 基礎知識に関しては講義ごとに配布するプリントを使用する。<br>2. 事例検討は日本繊維製品消費科学会発行（2024年1月発刊予定）の「苦情品診断学実践講座」を使用する。 | | |
| 自己学習（予習・復習等の内容・時間） | 講義中は問題意識を持ってよく聴き、不明な点があれば、積極的に質問する。分からないことをそのまま放置しない。講義後は復習をし、疑問点があれば、まず自分で調べて理解を図ることを原則とし、必要に応じて次回講義時に質問する。（週90分）<br>ショートテスト及び課題レポートが返却されたら、評価点を確認するとともに勉強不足の領域を見直し、認識を深めておく。（週90分） | | |